

# 6.

## 学術成果の発信

- 
- 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』
  - 2) プロジェクト報告書  
IGS Project Series

# 1) 『ジェンダー研究』

『ジェンダー研究』は本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌で、特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第1級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものである。



## 『ジェンダー研究』27号（2024年7月刊行）概要

### 特集「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」

『ジェンダー研究』27号では、暴力とセクシュアリティ／ジェンダーの関係をグローバル政治の領域において考察する特集を企画した。

フェミニズムは、長らく恥と沈黙に支配されてきた性暴力を可視化し、被害者が自らの言葉で語ることのできる空間を切り開いてきた。しかしグローバル政治において、セクシュアリティと暴力をめぐる言説は、被害者をエンパワーする側面だけでなく、ネイションや人種の境界を管理し、家父長制や異性愛主義を強化するような側面ももっている。2023年12月に開催したシンポジウムでは、セクシュアリティとジェンダーに関する言説を通して、何が暴力であり誰が保護／排除の対象であるかを定義し統制するような権力のありかたについて討論が行われた。本特集は、このシンポジウムでの報告をもとに、3本の研究論文を掲載した。

Carol Harrington 氏（ヴィクトリア大学、ニュージーランド）による研究論文「Womenomics Theories of Sexual Violence: Governing Toxic Men」は、ウイメンオミクス言説における「有害な男性性」に注目する。先進国の福祉政策や途上国開発政策において、またグローバルなビジネスセクターにおいて、「有害な男性性」は女性に対する暴力や貧困を引き起こすものとして問題化されている。しかしこの新自由主義的言説の焦点は女性の生産性を引き出すことにあり、「解決策」として、より生産的な異性愛家族に向けた男性性を提示することになる。

工藤晴子氏（神戸大学）の研究論文「From Security Threat to Subject of Protection: Examining Global Sexuality Politics in the Refugee Protection Regime」は、かつてクィアの人びとを国家安全保障上の脅威と位置付けてきたグローバルノースの外交政策における LGBTQ+難民の保護というナラティブを批判的に問い合わせる。そこには、自らを進歩の側に位置づけつつ境界を管理しようとするセクシュアリティの政治がなお作動しているのである。

嶺崎寛子氏（成蹊大学）の論文「ジェンダー・オリエンタリズムと定義する権力：イスラエルとエジ

プトの事例をもとに」は、イスラエルによるピンク・ウォッキングを例に、東洋に西洋世界にない独特／特殊な女性差別や女性蔑視を見出し、その「後れ」や「退廃」などの証左とする「ジェンダー・オリエンタリズム」が、いかに暴力を正当化するために動員されているか論じる。同時にエジプトの事例を通して言説と実態の落差に注意をうながし、感情の動員に抵抗するよう訴える。

投稿論文のセクションでは、厳正な審査を通過した4本の論考を掲載した。また書評セクションでは、近年に刊行されたジェンダー・フェミニズム関連書籍の中から19冊を取り上げ、三木那由他、板井広明、山岸大樹、小口藍子、古橋綾、関根麻里恵、荒木和華子、戸谷知尋、新井美佐子、金井郁、杉浦浩美、松浦優、酒井晃、山本めゆ、マグダレナ・コウォジェイ、菊地優美、嶽本新奈、宋連玉、Nozomi Lynette Uematsu の各氏による書評を掲載した。

## ■『ジェンダー研究』27号（2024年7月刊行）編集委員会

### 編集委員長

申 琦榮 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

### 編集委員

天野 知香	お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系
石丸 径一郎	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
大橋 史恵	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
倉光 ミナ子	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
宝月 理恵	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
森 義仁	お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系
脇田 彩	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

### 学外編集委員

板井 広明	専修大学経済学部
金井 郁	埼玉大学経済学部
北原 恵	大阪大学文学研究科
仙波 由加里	一般社団法人ドナーリンク・ジャパン
平野 恵子	横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院
三浦 まり	上智大学法学部
Jan Bardsley	ノースカロライナ大学

### 編集事務局

本山 央子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
嶽本 新奈	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
黒岩 漠	お茶の水女子大学ジェンダー研究所

## 『ジェンダー研究』27号（2024年7月刊行）目次

卷頭言	申琪榮
<b>特集：グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力</b>	
Womenomics Theories of Sexual Violence: Governing Toxic Men	Carol Harrington
From Security Threat to Subject of Protection:	
Examining Global Sexuality Politics in the Refugee Protection Regime	Haruko Kudo
ジェンダー・オリエンタリズムと定義する権力——イスラエルとエジプトの事例をもとに	嶺崎寛子
<b>投稿論文</b>	
国際協力NGOのネット広告にみるジェンダー表象——ポストフェミニズムと結託する植民地主義	近藤凜太朗
母たちが／と読む『母親になって後悔してる』	北村文
自治体非正規雇用の官民比較——男女共同参画センター相談員の全国調査結果から	横山麻衣・瀬戸健太郎
なぜ経済的リソースは「世帯内意思決定」に活かされないのか	
——インド都市の有配偶就業女性のエンパワーメント	新村恵美
<b>書評</b>	
ミランダ・フリッカー著, 佐藤邦政監訳、飯塚理恵訳、勁草書房	
『認識的不正義 権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』	三木那由他
江原由美子著, 有斐閣	
『持続するフェミニズムのために グローバリゼーションと「第二の近代」を生き抜く理論へ』	板井広明
メアリー・ホークスワース著, 新井美佐子、左高慎也、島袋海理、見崎恵子訳, 明石書店	
『ジェンダーと政治理論 インターセクショナルなフェミニズムの地平』	山岸大樹
レイワイン・コンネル著, 伊藤公雄訳, 新曜社	
『マスキュリニティーズ 男性性の社会科学』	小口藍子
クォンキム・ヒョンヨン著, 影本剛、ハン・ディディ訳, 解放出版社	
『被害と加害のフェミニズム #MeToo 以降を展望する』	古橋綾
アンジェラ・マクロビー著, 田中東子、河野真太郎訳, 青土社	
『フェミニズムとレジリエンスの政治 ジェンダー、メディア、そして福祉の終焉』	関根麻里恵
カイラ・シュラー著, 飯野由里子監訳、川副智子訳, 明石書店	
『ホワイト・フェミニズムを解体する インターセクショナル・フェミニズムによる対抗史』	荒木和華子
アミア・スリニヴァサン著, 山田文訳, 劲草書房	
『セックスする権利』	戸谷知尋
長田華子、金井郁、古沢希代子編, 有斐閣	
『フェミニスト経済学 経済社会をジェンダーでとらえる』	新井美佐子
クラウディア・ゴールディン著, 鹿田昌美訳, 慶應義塾大学出版会	
『なぜ男女の賃金に格差があるのか 女性の生き方の経済学』	金井郁
額賀美紗子・藤田結子著, 劲草書房	
『働く母親と階層化 仕事・家庭教育・食事をめぐるジレンマ』	杉浦浩美
アンジェラ・チェン著, 羽生有希訳, 左右社	
『ACE アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』	松浦優
杉浦郁子・前川直哉著, 青弓社	
『「地方」と性的マイノリティ 東北6県のインタビューから』	酒井晃
平井和子著, 岩波書店	
『占領下の女性たち 日本と満洲の性暴力・性売買・「親密な交際」』	山本めゆ
吉良智子著, 平凡社	
『女性画家たちと戦争』	マグダレナ・コウォジエイ
飯田祐子・中谷いづみ・笛尾佳代編著, 青弓社	
『プロレタリア文学とジェンダー 階級・ナラティブ・インターフェクショナリティ』	菊地優美
寺澤優著, 有志舎	
『戦前日本の私娼・性風俗産業と大衆社会 売買春・恋愛の近現代史』	嶽本新奈
高雄きくえ編, インパクト出版会	
『広島 爆心都市からあいだの都市へ「ジェンダー×植民地主義 交差点としてのヒロシマ」連続講座論考集』	宋連玉
Amanda Kennell著, University of Hawai'i Press	
ALICE IN JAPANESE WONDERLANDS: TRANSLATION, ADAPTATION, MEDIATION	Nozomi Lynette Uematsu
編集方針・投稿規定	

## 2) プロジェクト報告書 IGS Project Series の刊行

ジェンダー研究所では、開催したシンポジウムやセミナーでの講演や、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書、IGS Project Series を刊行している。2024 年度現在までの既刊は以下の通り。

IGS Project Series 1 (2016 年 3 月刊)
IGS Seminar “Choice and Consent in Prenatal Testing”
IGS Project Series 2 (2016 年 3 月刊)
国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？ 人類学の視座から改めて問う」
IGS Project Series 3 (2016 年 4 月刊)
特別招聘教授プロジェクト マリー・ピコーネ
IGS Project Series 4 (2017 年 2 月刊)
特別招聘教授プロジェクト アン・ウォルソール
IGS Project Series 5 (2016 年 7 月刊)
国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」
IGS Project Series 6 (2016 年 7 月刊)
特別招聘教授プロジェクト スザン・D・ハロウェイ
IGS Project Series 7 (2016 年 12 月刊)
国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」
IGS Project Series 8 (2017 年 3 月刊)
特別招聘教授プロジェクト エリカ・バッフェッリ
IGS Project Series 9 (2017 年 3 月刊)
IGS Seminar (Reproductive Area)、2016 The Ethics of Prenatal Testing
IGS Project Series 10 (2017 年 3 月刊)
国際シンポジウム 金融化、雇用、ジェンダー不平等
IGS Project Series 11 (2017 年 3 月刊)
IGS セミナー報告書 訳者と語る『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』
IGS Project Series 12 (2017 年 11 月刊)
国際シンポジウム 明治期のジェンダー、宗教、社会改良
IGS Project Series 13 (2018 年 3 月刊)
IGS セミナー 日本における女性と経済学
IGS Project Series 14 (2021 年 3 月刊)
国際シンポジウム 哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義
IGS Project Series 15 (2022 年 3 月刊)
特別招聘教授プロジェクト ラウラ・ネンツィ
IGS Project Series 16 (2022 年 3 月刊)
特別招聘教授プロジェクト アネット・シャート=ザイフェルト
IGS Project Series 17 (2018 年 2 月刊)
2016 年度生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会 報告書
IGS Project Series 18 (2021 年 3 月刊)
IGS 国際セミナー（生殖領域）報告書
IGS Project Series 19 (「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 3) (2021 年 3 月刊)
ジェンダー・選挙・女性の政治的代表性：2019 年インドネシア総選挙に関する分析
IGS Project Series 20 (「東アジアにおけるジェンダーと政治」Booklet Series 1) (2019 年 3 月刊)
台湾におけるジェンダークオータ
IGS Project Series 21 (2022 年 2 月刊)
IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）記録集「商業的精子バンクに関する問題：倫理・ジェンダー・社会的側面から」
IGS Project Series 22 (2022 年 2 月刊)
IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）記録集「生理の貧困」
IGS Project Series 23 (2022 年 2 月刊)
IGS オンライン国際セミナー（生殖領域）記録集「不妊と男性のセクシュアリティ」
IGS Project Series 26 (2022 年 2 月刊)
IGS オンライン国際フォーラム（生殖領域）記録集「出自を知ることがなぜ重要なのか：提供精子で生まれた人たちの経験と思い」
IGS Project Series 27 (2023 年 7 月刊)
ロー判決以後のアメリカ合衆国におけるリプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）